

多元的現実論の視角

—『現実の社会的構成』を手がかりに—

小保内太紀

The Perspective of the Theory of Multiple Realities:
Through “The Social Construction of Reality”

Taiki OBONAI

1 はじめに

社会的現実とは多元的なものである。これは、シュッツに端を発し、そのシュッツがニュースクール・フォー・ソーシャルリサーチで教鞭をとっていた際の教え子であるバーガー＝ルックマンによって結実した現象学的社会学がもたらした、最も重要かつ有名なテーゼの一つである（森 1995）。本稿は、バーガー＝ルックマンの主要な業績である『現実の社会的構成—知識社会学論考』（Berger=Luckmann 1966=2003: 以下、『構成』と表記する）の多元的現実論を再検討し、現代的意義のある新たな社会学の分析視角を構想することを目的とする。

『構成』の理論的フレームは、以下のように要約される。すなわち、社会の成員である諸個人が社会的世界を作り出していく「外化」のプロセス、そうして作り上げられた社会的世界がその中で生きる諸個人にとって確固たる現実となっていく「客体化」のプロセス、こうして構成された外在的であり客体的であるような現実が社会化の経験を通じて一生涯にわたり個人の内面に投影されていく「内化」のプロセスの三つが、持続的な相互作用として生じることで、社会が構成される、というものである。

『構成』には、知識社会学をはじめ社会学そのものに対するいくつかの批判的かつ示唆的な言及が挟み込まれているものの、基本的には前述した理論的フレームに即して、それぞれの過程についての詳細な議論が展開されている。

さて、この『構成』は、後にバーガーが『退屈せずに世界を説明する方法—バーガー社会学自伝』（Berger 2011=2015: 以下、『自伝』と表記する）において語っているように、社会学研究における大きな潮流、ないし学派を作り上げるための基盤となる理論となることが意図されてもいた（『自伝』:102-115）。ところが、『構成』は十八の翻訳が出るなど世界中で読まれたにもかかわらず、本来バーガー＝ルックマンが意図したものとは異なり、誤読の憂き目に合うこととなり、当初の野心が成就することはなかった（『自伝』:112-4）。『構成』は意図せざる誤読を受け、その後、学問の潮流を作り上げることはないまま、一つの古典となってしまった。

本研究は、そうして忘れられつつある『構成』そのものの理論的含意について、特にその重要な概念である「多元的現実」(multiple realities)の生成メカニズムとその機能、並びに個人の「意識」と「多元的現実」との関係に焦点を当て、検討することを目的とする。

本論文の構成について言及しておく。まず、第二節において『構成』がどのような文脈において、どのような意図をもって著された研究なのか、またそれがどのように理解されたのかについて、『自伝』や先行研究をもとに整理する。次に、第三節において、『構成』の多元的現実論の重要な概念である「至上の現実」と「飛び地」について検討する。その後、第四節において「至上の現実」と「飛び地」との関係について詳細に検討する。その際に、特に江原(1979)の議論を導きの糸とする。

2 『構成』の文脈

第一節において、本稿が何を問題としているかについて説明した。第二節では、『構成』が社会学においてどのような文脈に位置付けられるかについて検討したい。大まかに、『構成』がどのような潮流から生まれたものであり、また何を意図していたかについて検討する段階を、『構成』以前、そして『構成』がどのように受容され、またどのような文脈を作ったかについて検討する段階を『構成』以後として整理する。

2-1 『構成』以前

まずは『構成』以前についてであるが、『構成』は複数の文脈に位置付けられる研究である。ここでは、現象学的社会学としての『構成』、知識社会学としての『構成』、そして最も大局的な意味での理論的社会学としての『構成』の三点について検討する。

まず、現象学的社会学としての『構成』の文脈を整理しよう。『構成』は先述した三つの潮流の中では、最も一般的には現象学的社会学の文脈に位置づけられる。バーガー＝ルックマン自身も、『構成』が現象学的な発想に依拠していることを述べている(『構成』:34)。

現象学的社会学は、A・シュッツを祖とする社会学の潮流である。シュッツは、フッサール現象学とウェーバー社会学を再検討し、新たな社会学方法論としての現象学的社会学を打ち立てた(森 1995: 380)。現象学的社会学からは、バーガー＝ルックマンによる『構成』のほか、ガーフィンケルを中心とするエスノメソドロロジーなどのミクロ研究が発展したとされる(河野 2011)。バーガーとルックマンは、シュッツがニュースクール・フォー・ソーシャルリサーチで教鞭をとっていた時期の学生であり、後にルックマンはシュッツとの共著として『生活世界の構造』(1975=2015)を著すなど、強い影響関係が見て取れる。

なお、日本における現象学的社会学の受容は、1970年代以降、機能主義的・マクロ的な社会学に対する異議申し立てとして隆盛を見せた。小関(1986)は現象学的社会学について、「客観主義への一種の新たな、かなりソフィスティケートされた反動・アンチテーゼであり、ある意味で主観の復権と言うべき、揺り戻しである」と述べている(河野 2011)。

とはいえ『構成』は、こうした現象学的社会学の概念を多く援用している一方で、客観的事実性として現実を分析する姿勢をも同時に重視していたため、客観主義へのアンチテーゼという色合いはほぼないといってよく、むしろ積極的に客観主義的なアプローチをも統合しようとしていたといえる。

なお関連して、現象学及び現象学的社会学において重要な概念であり、『構成』においても主要な論点である「生活世界」という語は、江原（1979）が指摘するような注意が必要である。すなわち、フッサール現象学の文脈における自明な日常生活の現実としての意味と、シュッツやバーガー＝ルックマンなどの現象学的社会学における競合し合うリアリティの総体としての意味との二種類がありうる。現象学的社会学、並びに本論文が扱うのは、むしろ後者としての生活世界である¹¹。

次に、『構成』の持つ知識社会学としての文脈を整理する。バーガー＝ルックマンは、『構成』の議論に際して、知識社会学の新しいパラダイムの提示と、その理論的な基礎付けを意図していた（『自伝』：103-4）。実際に、『構成』の中においても、シェーラーやマンハイムなど、彼ら以前の伝統的な知識社会学の潮流に対して、二点の批判が為されている。

一点目の批判は、知識社会学における具体的な研究対象が、高度な思想、理論、文化など、限定的な知識、特に精神史に限定されていた点についてである（『構成』：22）。『構成』においては、従来の知識社会学が積極的に取り上げられて来なかった一般の人々の知識を含めた、社会生活を構成する日常的な知識全てを主題とする社会学としての知識社会学の必要が議論されている（『構成』：19-25）。

二点目の批判は、知識社会学における理論的な研究が、社会的な知識の妥当性を問う認識論に偏ってきた点についてである（『構成』：20）。バーガー＝ルックマンは知識社会学の枠組みで社会学的知識を主題とすることについて、「自分の乗っているバスを後押ししようとする」（『構成』：20）ことであり、解決することのできないものとして、それを退ける。バーガー＝ルックマンが『構成』において取り上げた理論的な焦点は、知識の妥当性構造ではなく、より一般的に知識そのものが現実を構成するありさまであった。

以上を踏まえると、バーガー＝ルックマンが用いるところの「知識社会学」という語は、社会的現実の中に生きる全ての人間の意識を取り上げ、現実が構成される過程を分析する、生活世界の社会学を意味するといえる。こうした意図のもと、『構成』においては社会学の伝統的概念のいくつかが、意味を日常的に拡張された形で用いられている。例えば、「正当化」や「制度」などの語は、政治的文脈に限らず、生活世界に現れる行動の繰り返しのパターンや、慣習のレヴェルをも射程とするものである（『構成』：338）。

最後に、より大局的な意味での理論社会学としての『構成』が持つ文脈についても整理しておく。『構成』は、社会学において最も古典的な対立の一つである、方法論的個人主義と方法論的集団主義との融合を意図するものでもあった（『構成』：314）。これはすなわち、ウェーバーに由来する理解社会学的な伝統を一部では受け継ぎながらも、社会そのものを客体として、人間に外在する<モノ>として扱うデュルケム流の社会概念を採用していたということである。この点については、後述するがいくつかの批判も存在する。

『構成』はここまで述べたように、現象学的社会学として、知識社会学として、大局的な意味での理論社会学として企図されたものであった。この三点の関係をやや大胆に整理すると、『構成』は知識社会学のための現象学的な理論社会学である、といえる。そして、『自伝』においてバーガーが語るように、『構成』の背後には理論的潮流を生み出すことの野心もまた存在していた。

2-2 『構成』以後

しかし、『自伝』においてバーガーが『構成』前後の時期について記述した章に「挫折せる帝国」と名付けた通り、バーガー＝ルックマンの学問的な野心は達成されなかった。バーガーは、『構成』の理論を用いた社会学の一学派の形成を失敗したことについて、「申し出があつて初めて断れる。だれからも申し出がなかった」（『自伝』：119）と半ば自虐的に回想している。

もちろん、当のバーガー自身は、『構成』以後にも精力的に『構成』の理論を援用した研究を続けている。『聖なる天蓋』（1967=1979）では宗教分析を、『故郷喪失者たち』（1974=1977）では官僚制や工業生産に着目した近代社会の意識分析を、それぞれ行っている。また、バーガー自身冗談めかして「誰からも申し出がなかった」とは言うが、むしろ現実にも何後続する研究を産まなかったわけではない。例えば金子(1993)は、バーガー＝ルックマンの『構成』における、生活世界における現実が構成的だというテーゼが、社会学における組織論の文脈で、新制度派組織論の理論的土台として援用されたこと、並びにそれが従来の技術的機能の観点からとらえられる組織像とは異なる組織像の観察を可能にしたことについて、マイヤーを例として指摘している。

とはいえ、『構成』が本来意図していたような学問上の広がりを生み出すことはなかった。この主要な原因として、バーガー自身は『自伝』において意図せざる誤読、すなわちエスノメソドロジーへの組み入れ、構築主義への組み入れ、革命的イデオロギーへの組み入れの三点を述べていた（『自伝』：120-5）。いずれについてもバーガーは厳しく批判しているので、典型的な記述を取り上げておく。

まずエスノメソドロジーについては、理論研究としての重要性がわからないと述べている（『自伝』：120-121）。次に、構築主義については、『構成』がもっとも組み入れられたものであると振り返り、「あらゆる現実社会的に構成されるのだから、客観的な真理など存在せず、少なくともそのようなものに到達することはできない」と考える思想傾向であるため、ニヒリズムに過ぎないと述べている（『自伝』123p）。また、革命的イデオロギーについては、1960年代に起こったマイノリティを承認しようとする一連の政治的動向に対しては、現実には潜む恣意的な構造を暴露するという社会学に似た志向性について共感的であったが、その後展開した反戦主義、反アメリカ主義、社会主義的運動には全く共感できなかったと述べている（『自伝』：139）。むしろ、バーガー自身の政治的立場は保守的であると知られている。

一方で同時に、『構成』はいくつかの核心をつくような批判をも受けている。以下、それらの批判について整理していく。

まず、『構成』と関心や主題に近いと考えられる解釈学的なアプローチをとる社会学研究者か

らは、『構成』の議論は現象学的社会学の立場を取りながらも、方法論的集団主義との概念的な融合が見られるために、折衷的であるとして批判された。こうした角度での具体的な批判としては、シュッツ研究で知られる西原（2001）の、現象学的社会学は自己の問題から出発して、発生論的な相互行為論をもとに、社会の生成並びに存立の問題へと敷衍していくものであってこそ独自性を持ち得るであるのに、バーガー＝ルックマンはミクロ社会学とマクロ社会学を折衷的に統合しようとする試みに過ぎなかったという批判がある。

ただし、バーガー＝ルックマン自身が、ウェーバー的な方法論的個人主義の社会学理論と、デュルケム的な方法論的集団主義の社会学理論とを統合する意図があったことを『構成』において記述している（『構成』：314）。また、『構成』における現象学的な独自性は、主体の意識が唯一絶対の現実を現象学的還元しえるものであり、多元的な社会的現実を認識しようという前提において保証されているものであり、それが社会的現実と個人の相互作用によってアイデンティティや社会制度を弁証法的に存立させるものであるという議論は、折衷的であるとしても現象学的社会学の現象学的特性を大きく損なうものではないとも考えられる。

一方で、『構成』の方法論的個人主義と方法論的集団主義とを統合する姿勢があったことを認めつつも批判している研究も存在する。例えば、佐々木（2003）は『構成』について、解釈的アプローチと構造主義的アプローチ・客観主義的アプローチとの統合を試みた先駆的な著作であると評価しながらも、概念折衷的な叙述に終始しているため、ミクロな対象を設定して運用する際には機能しないのではないかと批判している。一方で同論文は、ギデンズの構造化理論を取り上げ、解釈的アプローチと客観主義的アプローチを高度に統合し得たものとして高く評価している。また、下田（1987）は『構成』の議論について、ウェーバーとデュルケムの統合を意図したものが、デュルケムの勝利に終わっていると断じている。

この他にも、理論そのものの抱える欠陥について指摘する先行研究もいくつか存在する。例えば西原（1998）は、『構成』について、シュッツの社会学を日常的理解の構造解明、とりわけ行為と意味の社会学として延長させたものであるが、生活世界の安定性に安住し、社会変動や闘争を吟味できていないとして批判している。バスカー（1998=2006）も同趣旨の批判をしており、『構成』は社会のダイナミズムを捉えられていないとしている。

実際、『構成』においても、生活世界論の基礎である個人と社会の弁証法的過程が成立するためには、個人から社会への外化、社会から個人への内化の両プロセスが、完全とは言えないまでも、ある程度の調和を保つ必要があると述べられている（『構成』：276）。『構成』の議論は、その内的論理からして社会状況の大きな変動を捉えることが難しいといえる。

なお、この問題については加藤（1988）が示唆を与える。加藤は、社会化についての議論をG・H・ミードに依拠したバーガー＝ルックマンの『構成』について、社会化の本質を内面化と捉えているところに本質的な問題があり、外材する価値観や思考様式を個人が内面化して振舞うことで社会の秩序が保たれるとする議論は、主意主義的に行動する個人を想定しつつも、同時にそれが社会適合的な人間像であると措定してしまっている点において、構造的に誤りを含む、と論じている。加藤は同論文において、こうした議論の構造は『構成』のみならずパーソンズの議論にもみられるとしたうえで、社会化の過程に関する研究が社会学から心理学に＜外

注>され、社会学の議論の俎上においては社会化現象そのものがブラックボックス化されることをもたらしたとも批判し、社会化をむしろ個人の内面における過程としてではなく、社会過程として解釈し、個人と社会のメゾな結節点を構想する必要があると述べている。

ここで、社会化についての『構成』の議論を確認しておこう。『構成』では、社会化については、幼児や子どもが社会に適応する過程としての第一次社会化と、分業の進んだ社会において専門的な知識が分配されていく第二次社会化とが区別された形で論じられている（『構成』：232-3）。

こうした二つの社会化は、いずれも外在的な社会を個人が内面化する「内化」仮定であるとして描かれている。『構成』における「内化」に関する議論は、G・H・ミードの社会化論に依拠しており、それを敷衍して制度論に適用したものである（『構成』：330）。なお、ミードの社会化論は、『精神・自我・社会』（1934=1973）に詳しく、他者の態度を一般的なものとして自己の中に取り込み、ある一定の状況に対して、共通の反応を期待できるようになることで、組織的な自我が成立することが述べられている。ミードの議論における「一般化された他者」を、より敷衍して構造的な社会事象にまで広げたものが、『構成』における内化理論である。

さて、先述した加藤論文は「主意主義的に行動する個人像」と「社会適合的な人間像」との矛盾を人間像の問題に由来するものとして論じているが、『構成』の議論を省みると、その方法そのものにも問題があることが考えられる。すなわち、第一次社会化と第二次社会化が分節されることによって、個人の特に内面における社会化と、個人の高度に社会的な文脈に即した社会化とははっきりと分節されてしまい、加藤の指摘する<メゾな結節点>が理論構成上存在しえなくなっているということである。

このように、『構成』は、エスノメソドロジーや象徴相互作用論、会話分析などに代表されるようなミクロな臨床的研究をもたらすための理論としては、よりラディカルなものと比較されたうえで適していないと考えられており、かといって理論研究としては既に取り上げられてしまったものとして理解されたり、あるいは構造上の欠陥が指摘されたりしている場合が多い。

とはいえ、『構成』から得られるものが何もないわけではない。『構成』の、あるいは現象学的社会学の一つの概念的な到達点である「多元的現実」に着目しながら、次節にて『構成』の生活世界論を吟味する。

3 『構成』の多元的現実論

第二節では、『構成』がどのような意図で著されたか、また、どのように読解・評価されたかについて論じた。続く第三節では、『構成』の多元的現実論について取り上げる。『構成』においては、多元的現実論としての生活世界論が展開される。その際、重要な概念として「至上の現実」と「飛び地」の二つがある。この二つの概念について、それぞれ『構成』の記述をもとに概略を示す。

3-1 「至上の現実」論

まず、『構成』における生活世界論の概念的な構成を確認しておこう。『構成』において生活世界とは、社会を構成する人間が生きる現実のすべてを含むものである。現象学的社会学において現実とは多元的なものであり、宗教体験、美術や音楽など芸術にまつわる体験、空想などにも一つの現実としての地位が与えられているが、その中でも最も基本的なく日常生活における現実のことを、特に「至上の現実」と呼ぶ（『構成』：36・40）。

『構成』における社会構成の論理は、生活世界のうち「至上の現実」においてこそ、特に明瞭に現れる。すなわち、＜日常世界＞は社会構成のための個人と社会の弁証法的過程が維持される場なのであり、その過程によってのみ現実性が維持されるのである。この相互作用が持続する限りにおいて、＜日常世界＞の現実は、「至上の現実」であり続ける。

ここで重要なことは、『構成』においては、「現実」とは絶対性を持って立ち現れるものとして描かれているということである。『構成』の冒頭では、「現実」について「われわれ自身の意志から独立した一つの存在をもつと認められる現象に属する一つの特性」（『構成』：1）という定義が為されている。『構成』において最も説明の力点が置かれているのは、現実がこうした強固な現実性を獲得していく、「客体化」のプロセスについてである。いかんにして「至上の現実」が構成されるのか、その重要な局面である「客体化」の側面から検討する。

まず、現実が客観的なものとなるための基礎として、『構成』では言葉の働きが取り上げられている（『構成』：66）。『構成』においては、言葉の主要な働きとして、あらゆる意味領域を客観的な知識として現実統合するということが述べられている。言葉は、主観的な個人によって操作されるものでありながら、主観から離れてなお意味をある程度は維持することができる。それゆえ、言葉は「私」という主観を超え他者と共有されるものであるとともに、時間や場所を超え共有されるものでもある（『構成』：66-68）。さらには、言葉は日常における「至上の現実」を超えた、宗教的体験や空想、芸術体験などの非現実をも、知識として現実還元し、統合する作用を持っている（『構成』：69）。このようにして、言葉は「私」の存在について、他者にとっても、自身にとっても確実なものとする（『構成』：66）。

こうした言語の持つ客体化の働きは、個人のミクロな生活世界の秩序を構成すると同時に、制度化を契機として、よりマクロな構造的な社会秩序をも成立させている（『構成』：102）。制度化は、言語によって構成され、社会を分節し、知識を配分し、社会秩序を可能にするのである。こうして形成される社会秩序は、個人にとっては自然のように絶対的、客観的なものとして経験される（『構成』：103）。制度化は諸個人に役割を与え、例えば職業的な専門知識を職業人が専有するような具体的な下位社会を構成する契機となる（『構成』：131）。また、制度化は、それが持つ統制や制裁の機能に妥当性を与えるために、制度をより客観化し、意味づけを強固にする正当化の過程を伴う（『構成』：157-159）。この正当化の過程を経て、より強固となった制度は、客観的なものとして個人の生活世界に立ち現れ、それを形作るものとなるのである。

一方で、「至上の現実」の安定性を演出する要素として、『構成』では言葉の他に他者を取り上げられている。他者との対面的状況におけるコミュニケーションは、現実の客観性を強化し、「至上の現実」を生む要素であるとされる（『構成』：50）。他者との対面状況にあるとき、人

間は自らの＜いま、ここ＞と相手の＜いま、ここ＞とを、持続的な相互作用として浸透させ合い、社会的に結び付きあう（『構成』：47）。こうした状況にある他者との相互作用は、これは、＜私＞が＜私＞を解釈し、理解しようとする際には、内省が必要であるのに対して、＜私＞が＜彼＞を解釈し、理解しようとする際には、内省が不要であり、まさに＜いま、ここ＞にある他者へと接近すればよいため、『構成』の議論における、もっとも根本的に客観的現実を構成する形式である（『構成』：49）。

生活世界における他者との関わり合いは、相互的に類型化し合う過程であり、典型的な場（ゴルフ場、飲み屋、学校など）において、典型的な他者（先生、セールスマン、コールガールなど）と行われるものである（『構成』：53）。こうした類型化は、他者との距離感によって精度が変化する。すなわち、他者から遠ざかれば遠ざかるほどに類型の匿名化が生じるのである（『構成』：53）。だからこそ、対面的状況における他者とのコミュニケーションが、最も現実性を構成しやすく、客観的なものとして現れる。ここまで述べてきたような他者との対面状況は、まさしくミクロな相互行為によって、社会が構成される契機として解釈できる。

言語や他者によって客観化した世界は、意味ある形として個人に解釈され、内化される。このとき、自己もまた知識として主題化され、それによって個人のアイデンティティが形成される。『構成』においては、「至上の現実」とはまさしく個人と社会を接続し、両者に確固たる実在性を付与する場なのである。そして、個人と社会の構成は、いずれも片方を欠いては不可能であるような相互依存性のもとに成り立っているのである。

3-2 「飛び地」論

次に、「飛び地」について取り上げる。『構成』における多元的現実論は、確固たる現実性を持った「至上の現実」に関する議論と、至上の現実とは異なった意味を持つ領域であり、現実からの跳躍を伴うような「飛び地」に関する議論との二つの部分がメインである。

「飛び地」とは、例えば宗教的体験や芸術的体験、臨死体験など、一種のフィクション性、日常からの離脱性を伴って経験されるような現実をいう（『構成』：43）。『構成』の生活世界論は、世界が客観的であるような有様を強調しつつも、そこには意識される多元性が存在することを認めてもいるのである。

とはいえ、「飛び地」は純粋に独立した世界ではない。『構成』における「飛び地」の議論は、徹底して「飛び地」が「至上の現実」に依存したものであることが強調される形でなされる。「飛び地」的な現実を構成しているのは、「至上の現実」において獲得された言葉であり、また、「飛び地」は「至上の現実」にその言葉によって組み込まれる形で解釈され、意味づけられるものであるとされているのだ（『構成』：68-9）。ゆえに、「飛び地」とは「至上の現実」から飛躍した時空間であり、独自の知識や解釈の体系を持ち得るものでありながら、絶対的に「至上の現実」に隷属するものとなる。

ただし、このことは「飛び地」が「至上の現実」に対して何ら影響力を持たないことを意味するのではない。「飛び地」は「至上の現実」と同じ言葉や概念装置からなる、異なる意味の体系を持っている。だからこそ、生活世界それ自体のあり方を相対化する契機となりうるもので

もある。

4. 「至上の現実」と「飛び地」との相互関係

さて、ここまで、生活世界の最も基本的な構成要素である「至上の現実」と、生活世界をまさに多元的現実たらしめる「飛び地」とについて、それぞれ整理してきた。第四節では、多元的現実を構成する「至上の現実」と「飛び地」との相互関係について検討したい。まず有力な先行研究として、江原（1979）の多元的現実論解釈を批判的に吟味する。そののち、新たに多元的現実論を読解する方法を提示する。

4-1 先行研究

まず、同様の問題関心をもって、多元的なリアリティ間の関係について詳細に検討し概念的に類型化することを試みた江原（1979）の研究を整理することとする。江原によれば、人間が多元的な現実を生きることには、以下のような三つの前提が存在することが論理的に導出されるという。

- 1 人間は、分業によって異なる「知識」を分有する集団を生み出す。
- 2 人間は、経験を統一し世界を秩序づける為に、世界を対比的・対立的に分節する。
- 3 人間は、様々な意識状態を持つ。（江原 1979）

この前提から敷衍して、江原は人間が社会的現実の多元性を把握する方法として、集団や制度に基づいた現実の把握、ある現実の解釈枠組みに基づいた現実の把握、意識のあり方に基づいた現実の把握の三類型があると指摘した。そして江原は、このうち3にあたる、意識によって生じる現実の多元性のみが、他の前提と独立に現実の多元性を生じさせるものであると考え、ピアジェの発達心理学に着想を得て、多元的現実として「身体的リアリティ」「象徴的リアリティ」「日常生活的リアリティ」「論理的認識的リアリティ」の四世界を取り出しうるものとした。これらはピアジェの有名な発達理論の、「感覚運動期」「前操作期」「具体的操作期」「形式的操作期」と対応している。江原は、発達段階の子どもが新たに獲得していく創発特性としての認知的態度が、成人の生きる世界に多元的リアリティとして存在するのではないかと考えたのである。

このような議論の結論として、江原は、それぞれの多元的現実の特徴を表1のように整理し類型化した。

表1 多元的現実の特徴とその類型

リアリティ類型	分節－混沌	拡散－凝集	生じうる危機
身体	混沌	拡散	人格喪失
象徴	混沌	凝集	妄想執着
日常生活	分節	凝集	過同調
論理的認識	分節	拡散	疎外

(江原 1979 より作成)

江原によれば、「分節－混沌」軸は、主客の分化－未分化を意味している。また、「凝集－拡散」軸は、世界に主体的に関与する際の目的や欲求の凝集－拡散を意味する。そして、生活世界において、人間はそのリアリティにおいて危機に際した際に、「分節－混沌」「拡散－凝集」のいずれかを行き来することでリアリティを移行し、生活世界を解体したり、再編したりするのだという。そしてこのように多元的現実を生きる能力こそが、人間の自由であるのだと江原は総括する。

さて、この江原論文における多元的現実論について検討しよう。江原が結論とした多元的現実の類型化は、多元的現実相互の座標的關係を明らかにしており、その点については強い説明力を持っている一方で、現実間を移行することの具体的機能について特に詳細になっていない点で課題が残る。また、類型化の前提として、現実の多元性の根拠を主体の意識に強く求めていることから、社会的な契機による多元的現実の移行を捉えることができず、心理学的傾向の強い議論となってしまう。すなわち、現実の多元性の存立根拠を個人の意識に求めるあまり、多元的現実そのものが固定されてしまっているのである。これらの事情から、多元的現実を構成している諸リアリティ同士の関係がどのようなものであるかを捉えるには至っていない。

こういった問題点は、「至上の現実」と「飛び地」との立場上の上下関係を捉え切れていないことに由来していると考えられる。すなわち、「飛び地」とは確かに一定の独立性を持った現実の一局面ではあるが、一方で「至上の現実」に依存するものでもあるのである。その意味で、多元的現実間を移動する個人というのは、必ず「至上の現実」を生きねばならないのであり、また、リアリティ間に何らかの競争関係が見られたとしても、その競争そのものの勝敗はあらかじめ「至上の現実」の勝利と決まっている、いわば＜疑似的な競争関係＞であるといえる。この＜疑似的な競争関係＞を、あたかも対等な競争関係であるかのように捉えている点に誤りがある。

「飛び地」について、あくまでも「至上の現実」に依存したものであるとして解釈することは、「飛び地」が「飛び地」であることの意義、ないしその特性を一切貶めることはない。なぜならば、「至上の現実」の秩序に関係づけられてこそ、「飛び地」が個人の意識によって解釈され、意味があるものとなるからである。「飛び地」が個人にとって何らかの意味を持ちうるとしたならば、それは「至上の現実」と分かちがたく結ばれている場合においてなのである。「至

上の現実」と結びつかない意味があるとするならば、それはもはや社会的現実の多元性を生きることのできない意味である。

さて、これらの観点・問題意識を踏まえて今一度『構成』に立ち返り、「至上の現実」と「飛び地」の相互関係を捉え直したい。

4-2 「至上の現実」の持つくアノミーの縮減機能>

まずは「至上の現実」が、個人の意識にとってどのような機能を持ちうるかについて検討しよう。『構成』においては、人間にとって社会的現実の自明性や客観性を要求せざるをえないような契機として、恐怖や緊張などのアノミー、特に死の根源的恐怖により生じるアノミーを挙げている（『構成』：171・3）。この「死」という現象それ自体を、制度的秩序など客観性のある意味の体系に位置づけ、知識として生活世界に結びつけることによって、人々は「死」から生ずるアノミーを縮減し、恐怖を緩和しているというのだ（『構成』：339）。

秩序ある社会的現実を構成することによって、アノミーを縮減する現実構成の意識上の戦略性について、『構成』においては「恐怖緩和的性格」という言及が為されている（『構成』：173）。『構成』において想定されているアノミーは、必ずしも恐怖のみではないため、こうした生活世界において「至上の現実」が特権的に持っている、秩序や自明性、安定性によって恐怖や緊張を縮減する機能について、<アノミーの縮減機能>と呼ぶこととする。

なお、このようにアノミックな過程を縮減させ、現実並びに意識を安定化させようとする人間の性質について、バーガーはのちに『構成』を理論的支柱としつつ宗教社会学を展開した著作、『聖なる天蓋』において、以下のように述べている。

「社会的に確立された規範秩序は、おそらくその最も重要な局面において、恐怖を防ぐ盾として理解してよからう。言い方をかえれば、社会のもっとも大切な機能は秩序化なのである。これに対する人間学上の前提は、本能の力をもつかのごとく思われる人間の意味への執着である。…社会にあるとは、まさしくそのような規範喪失の恐怖がもたらす極限の狂気から護られているという意味において正気であるということである。（『聖なる天蓋』32-3）

この記述を踏まえると、江原が「飛び地」のリアリティにおける危機として提示した「人格喪失」「妄想執着」「疎外」などが、すべて「意味への執着」の加熱ないし冷却によって生じる「狂気」であると解釈できる。「狂気」の持つ現実及び意識に対するアノミックな特性を縮減するために、「正気」を求めて「至上の現実」に没頭する人間の意識的戦略こそが、<アノミーの縮減機能>に由来するものであるのだ。

なお、同著においてバーガーは、社会的生活の日常的秩序たるノモスは、それ自体が欠陥を含みうるものであり、可変的であり、非常に不安定であるということにも言及している（『聖

なる天蓋』28-35)。至上の現実が持つ＜アノミーの縮減機能＞は、その源泉たる日常的秩序が不安定であるゆえに、絶えず失敗の可能性を含む過程であるということも指摘できる。ここには、アノミーを縮減するための機構としての「至上の現実」そのものにアノミーの源泉があるというアイロニーが見える。

4-3 ＜アノミーの縮減機能＞と物象化のジレンマ

ここまで見てきたように、「至上の現実」が果たす役割は、制度化や正当化を伴い生活世界の自明性を高めることで、アノミーの縮減に寄与することにある。ただし一方で『構成』においては、同時にこの＜アノミーの縮減機能＞をもたらす生活世界の自明化、ないし「至上の現実」のヘゲモニー化が、ジレンマを含むことも論じている。江原も洞察していたことではあるのだが、アノミーを縮減すべく生活世界の自明性を強化することは、「物象化」現象をもたらしうるのである（『構成』：152）。

物象化とは、ここでは「人間的な諸現実をあたかもモノであるかのように理解すること、つまり非人間的な、あるいは、おそらくは超人間的なものとして、理解すること」「人間の活動の産物をあたかも人間の産物以外の何物かであるように理解すること」を意味する（『構成』：151）。これは、単に社会的現実をモノ的に理解することを意味するのではなく、社会的現実を所与の自然超人間的な作用であり、人間の営力による変更が不可能であるものとして理解することを指す。アノミーを縮減させるための「至上の現実」は、かえって社会的現実そのものを物象化することによって、社会の成員が、アノミーを引き起こすような社会的現実を絶対的なものとして意識してしまうアイロニカルな逆説を導くのである。表1を参照するところの「過同調」がこれにあたる。

『構成』では、生活世界において社会的現実が物象化することについて、人間主義的な立場から危機感が表明される（『構成』：153）。『構成』では、「至上の現実」の自明化と物象化とのジレンマを巡る決定的な問題として、社会的世界は人間によって作り出されたものであって、それゆえに人間によって作り変えることができることを、常に意識し続けられるかどうか、が挙げられている（『構成』：152）。人間は物象化した形で社会を理解しようとなお、日常的に社会を構成し続けることができってしまう。だからこそ、社会をいかに理解するかが重要なのである。社会とは可変的なものであり、人間の被造物であることを意識することによって、物象化を避けることができるのだ。先述した＜アノミーの縮減機能＞を揺るがしうるノモスの不安定性、可変性は、ここにあって社会的現実の物象化を避けるための契機ともなりえることになる。

4-4 「飛び地」の持つ＜物象化の縮減機能＞

さて、ここで特に、＜アノミーの縮減機能＞と物象化のジレンマを解決する一つの可能性として、前節で取り扱った「飛び地」を取り上げたい。「飛び地」は生活世界の自明性をなんら脅かすものではないと同時に、現実にも多元性を与え、複数の現実間の行き来の自由を、諸個人の意識に与える。「飛び地」での経験や、「飛び地」の持つ象徴的な意味体系や諸価値を「至上の

現実」に関係づけることは、「飛び地」を社会的世界において成立させるのみならず、「至上の現実」の相対性をも諸個人の意識に自覚させる。バーガーの『社会学への招待』の言葉を借りるならば、社会学は暴露的性格を持っているのであり、「人形たちと違って、われわれは自分たちの動作をやめて自分たちを動かしてきたからくりを見上げ認識するという可能性が残されている」（1963=1979 258）のである。

このとき、物象化の度合いは「至上の現実」を相対化する「飛び地」が存在しない場合に比較して、当然小さなものとなる。生活世界の自明性を高めることが＜アノミーの縮減機能＞を持つならば、「飛び地」を生きることには、＜物象化の縮減機能＞があると考えられる。

4-5 「至上の現実」と「飛び地」の相補／緊張関係

「至上の現実」が持つ＜アノミーの縮減機能＞と、「飛び地」が持つ＜物象化の縮減機能＞は、双方が機能したときには、相互補完的に人間の生に人間性を与えるものとなりうる。多元的現実を生きることができる能力こそが人間の自由であるという点において、江原と見解を一にしたうえで、さらにそれが人間に人間的な生を与えうるという点を強調しておきたい。

一方で、「至上の現実」と「飛び地」とには相補関係のみではなく、緊張関係を見て取ることもできる。すなわち、一方ではアノミーを縮減しうる「至上の現実」は、社会的現実に対する物象化を増大しうるものとなり得るのであり、また、一方では物象化を縮減しうる「飛び地」は、社会的現実の秩序をも相対化しうるために、アノミーを増大しうるものとなり得るのであるのだ。

社会的現実と個人との間の相互作用は、個人のアイデンティティを不断に生成・再構成する（『構成』：296-9）。だからこそ、「至上の現実」ばかりを生きていては、現実には物象化を免れなくなってしまう。江原の述べるところの「過同調」もこれを問題にしたものだ。一方で、「至上の現実」に立ち返ることなく「飛び地」ばかりを生きていては、人間の生は狂気へと変貌する。ゆえに、「至上の現実」「飛び地」の双方の＜機能＞が十分に機能するためには、「至上の現実」が本質的には優越することを踏まえながらも、「至上の現実」と「飛び地」との間に、＜疑似的な競争関係＞が成立していることが必要となるのだ。

この＜疑似的な競争関係＞は、意識に対して、時に「飛び地」へと没頭することを要求するかもしれないし、「至上の現実」について疑念を提出したり、一時的に括弧に入れたりすることを要求するかもしれない。いずれにせよ、意識は「至上の現実」を生きることになるのだが、その生のあり方を規定する一つの重要な要素として、＜疑似的な競争関係＞があるのだ。

5 結びに代えて—多元的現実論はどこへ向かうか

ここまで、本稿では『構成』について、その文脈や内容について整理したうえで、多元的現実論としての読解を試み、その主要概念である「至上の現実」と「飛び地」について検討した。「至上の現実」とは、生活世界の基本となる日常生活の現実であり、「飛び地」とは、生活

世界からの飛躍を含む現実である。「飛び地」は「至上の現実」から飛躍したものであるが、一方で「至上の現実」によって意味づけられるものでもあるということが論じられた。

こうした概念の整理をもとに、『構成』における「至上の現実」と「飛び地」との関係について考察した。まず、「至上の現実」には＜アノミーの縮減機能＞があることを導出した。しかし、この＜アノミーの縮減機能＞は、一方で社会的現実を物象化しうる危険性を持つ。そのとき、＜物象化の縮減機能＞を持つ「飛び地」を生きることによって、相補的に生に人間性が付与されるということを論じた。一方で、「至上の現実」と「飛び地」それぞれの＜機能＞が十分に機能するためには、「至上の現実」と「飛び地」との間に、「至上の現実」の優越が分かっているながらも競合し合うような、＜疑似的な競争関係＞が存在する必要があるということを指摘した。

ここまで、『構成』の検討を中心として、多元的現実論の視角について吟味してきた。『構成』の多元的現実論は、「至上の現実」と「飛び地」との関係を扱うことによって、人間の意識や生のあり方についてのダイナミックな過程を説明する理論となりうることが示されたと期待したい。

さて、『構成』を著したのち、バーガー＝ルックマンはいずれも宗教社会学の研究にかなりの労力を割いた。実は『自伝』においてバーガーは、近代が生み出した多元主義がどのように宗教を変質するかについて、予測を間違えたことを告白している（『自伝』：179-181）。バーガーは、多元主義（ないしは近代がもたらした信念と価値をめぐる集合的一致の弱体化）が、宗教を世俗化させ、コスモスを弱体化させると考えた。しかし、多元主義が導いたものは、必ずしも宗教を世俗化させることなく、むしろいかなる世界観もはや自明視されることがなく、多元的な世界観の中から個人が秩序立った説明、ないしは世界観を選択しなければならないような状況であった。

多元的な世界観は、そのまま多元的な社会的現実を構成する。何ら絶対的なものはないとされる、相対主義の跋扈する現在にあつて、それらを超克しうるものとして、あるいは、超克しえないにせよ説明しうるものとして、現実の多元性、相対性を論じつつも現実の客体性を過度に疑うことはせず、リアリティ相互の関係を論じることのできる多元的現実論は、無視できない説明力を持つはずである。それは、ともすれば広義の日常的な宗教社会学として、「ヒューマニスティックな学問としての社会学」として、人間の価値観・世界観とその生のありようを論ずる視角となりうる。こういった構想の方向性は、バーガー＝ルックマンの当初の野心から、そうかけ離れてはいないだろう。

とはいえ、本研究は筆者の力量や最適な資料の乏しさなどから不十分なものとなっているに違いない。何よりも今後の課題は、何らかの類型的な場、臨床的な問題を設定し、経験的研究として多元的現実論を応用することであろう。現に、『構成』においても以下のような文言がある。

「いかなる経験的学問においても、理論は二重の意味でその学問の守備範囲として定め

られた<データ>に適合したものでなければならない。つまり、理論はデータに見合ったものでなければならないと同時に、さらにそれ以上の経験的研究にも使えるものでなければならないのだ。」(『構成』:317)

そういった経験的研究の存在が、再び理論の説明力を向上させることに繋がりうることを、あらゆる社会学者は、そしてバーガー＝ルックマンは経験的に知っているのだ。

〈注〉

- (1) なお、『構成』の旧訳版の邦題は『日常世界の構成－アイデンティティと社会の弁証法』(1977)であったが、新訳版になって『現実の社会的構成－知識社会学論考』(2003)と邦題が変わった。訳者はいずれも山口節朗である。

〈文献〉

- Berger, Peter, L. and Lookmann, Thomas, 1966, *The Social Construction of Reality*: Penguin University Books (=2003, 山口節朗訳, 『現実の社会的構成』, 新曜社。).
- Berger, Peter, L., 1963, *Invitation to Sociology*, Doubleday (=1979, 『社会学への招待』, 思索社。).
- Berger, Peter, L., 2011, *ADVENTURES OF AN ACCIDENTAL SOCIOLOGIST: How to Explain the World without Becoming a Bore* (=2015, 森下伸也訳, 『退屈せずに世界を説明する方法－バーガー社会学自伝』, 新曜社。).
- Berger, Peter, L., 1979, *The Sacred Canopy: Elements of a Sociological Theory of Religion*, , Doubleday (=1979, 園田稔訳 『聖なる天蓋＝神聖世界の社会学』, 新曜社。).
- Bhaskar, Roy, 1979, *The Possibility of Naturalism: A Philosophical Critique of the Contemporary Human Sciences*, Harvester Press (=2006, 式部信訳, 『自然主義の可能性－現代社会科学批判』, 晃洋書房。).
- 江原由美子, 1979, 「生きられる世界の解体と再編－多元的リアリティへの一視角－」『社会学評論』第30巻1号。
- 金子雅彦, 1993, 「知識社会学的組織論の視点－社会学的新制度派組織論を中心に－」『社会学評論』第43巻第4号。
- 加藤隆雄, 1988, 「内面化と社会的前意識－社会過程としての社会化－」『教育社会学研究』第43集。
- 河野憲一, 2011, 「テーマ別研究動向(現象学的社会学)－現象学的社会学の展開可能性」, 『社会学評論』62巻4号。
- Mead, George, Harbert, 1934, *Mind, Self, and Society*, ed. C.W. Morris, University of

Chicago (=1973, 稲葉三千男・滝沢正樹・中野収訳, 『現代社会学体系 10 ミード 精神・自我・社会』, 青木書店。).

森元孝, 1995, 『アルフレート・シュッツのウィーンー社会科学の自由主義的転換の構想とその時代へ』, 新評論。

西原和久, 2001, 「自己から社会へー現象学的社会学の社会理論ー」『現代社会学研究』第 14 卷 1 号。

佐々木洋成, 2003, 「解釈的アプローチの可能性について」『年俸社会学論集』16 号。

下田直春, 1987, 『社会学的思考の基礎』新泉社。

梅村麦生, 2013, 「A・シュッツの多元的「構成」論」『ソシオロジ』58 卷 3 号。